

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化

<史料館だより>

目次

- ◇神戸市東灘区旧本庄村深江地域の山の神について……………望月 浩 2
- ◇史料に読む深江の歴史 (八)
江戸前期の森稻荷神社と村……………大国正美 5
- ◇トライやる・ウィークと史料館
— 本庄中学校の生徒を受け入れて —……………道谷 卓 6
- ◇史料館日誌抄……………道谷 卓 8

1999.10.10
NO.26



「深江山の神の祠」▶

安政5年(1858)の銘文が刻まれている。

(本誌2P参照)

神戸深江生活文化史料館

神戸市東灘区旧本庄村 深江地域の山の神について

史料館学芸員 望 月 浩

神戸市東灘区旧本庄村深江地域には、昔から信仰の対象とされてきたものに、「山の神」がある。山の神は、山に宿る神聖の総称である。農民・山民・漁民と信仰する人々によってその性格や祀り方は違ってゐる。農民の信仰する山の神は作物の神で、毎年山と村との間を往復し、春になると村に降りてきて田の神となつて稲の成育を守り、秋に稲が実ると、山に帰つて休むと信じられている。深江地域のある六甲山の南麓は、大きな川や湖がなく、瀬戸内式気候のため、水資源の確保は大きな問題であつた。そのため、日照りなどで池や川の水が干上がつてしまうと、この山の神にお参りをしていた。深江の人々にとって山の神は雨乞いの神様でもあつた。この辺りでは、六甲山頂の一軒茶屋の少し東にある石宝殿いしほうでんという石の祠が、多くの河川の分水嶺にあたるため、水の神様として信仰を集めてゐる。



山の神の祠

地図1 山の神所在図
(国土地理院地形図1 / 25,000
西宮を利用したものである)



深江の山の神は、昔は一月四日にお祀りをしてきたが、現在は六月と十一月に行なつてゐる。六月は、第一日曜日に山の神の祠を管理・世話をしてゐる深江大日靈女神社奉賛会の人たち十五、六人が朝出発をしてお参りをする。祠にお供え物をして、祠の周囲が傷んでゐるところを修理・整備をする。十一月は、二十三日の祝日に、深江地域の北の森北町にある稲荷神社の宮司と奉賛会の人たちがお参りをする。深江地域の氏神は大日靈女神社であるが、旧森村の稲荷神社は深江を含む広い範囲の村々の氏神でもあつた。そのため、大日靈女神社には宮司が不在なので、稲荷神社の宮司にお祓い・祝詞をあげてもらつてゐる。六月と同様、朝からでかけ、午前中には帰ってくる。どちらも普通の服装で行く。戦後にはこのような年二回のお参りになつたさうである。祭神は大山祇大神おほやまのみこと・大山津見神おほやまのみのみことである。大山祇神は伊弉諾尊・伊弉冉尊との間に生まれ、各地の山をつかさどる神である。

今回紹介する深江の山の神は、通称魚屋道（とじやみち）の傍らに所在する。魚屋道は六甲山を南北に通ずる道で、江戸時代には間道として周辺の宿駅から訴えられることもあったほど、多くの人々の利用する道であった。山の神は、魚屋道を歩く人々からお参りをされてきたのである。所在地は地図1を参照してほしい。本山町北畑の保久良神社から金鳥山を経て風吹岩に至る道が、本山町森から蛙岩（かまご）を経て同じく風吹岩に至る魚屋道に合流する。この合流地点から魚屋道を蛙岩に向かって百メートルほど進んだところに一基の道標がある。形状は四角柱で上部が四角錐になっている。花崗岩製。高さは百七センチを測り、側面は各五・五センチの幅を測る。各面に縦書きで字が彫られている。道路に面している面には「深江山ノ神」、その向かって右側に「→深江山ノ神」、左側に「←深江山ノ神」、裏面には二行にわたり、「昭和六十年五月吉日 深江財産区建」と彫られている。この道標から藪の中の道を五十メートルほど進むと一段高い土壇になっていて、その上に一基の石標と一基の祠が立っている。

向かって右に立っている石標は、いつごろからここに置かれていたかわからないが、板状の表面は研かれています、「正一位千鶴大神」と刻まれ、その下に二行にわたり「大正十三年十月吉日」⁽¹⁾奉主小川升□と刻まれている。頭部は山型で、側面と裏面は不整形である。高さは七十センチを測り、幅は十二・五センチを測る。



魚屋道から山の神を示す道標

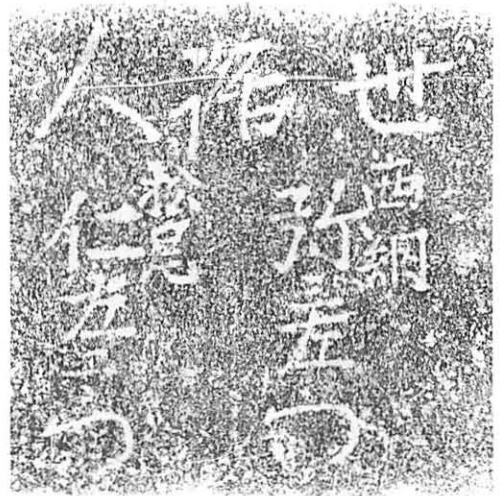
山の神の祠は石標の向かって左側に所在している。南向きでコンクリートの台上にあり、花崗岩製で、基礎の上に室部があり、その上に屋根がのっている。基礎は、幅四十四センチ、高さ二十二・五センチを測り、各面とも無地である。その上の室部は高さ二十八センチ、幅二十三・五センチを測る。正面は扉になっていて、中に祠よりもかなり時代の下る真新しい花崗岩の台石の上に、同じ石で作られたご神体の直径六・五センチの丸石が安置されている。扉は幅十センチを測る。向かって右側の扉の表面には瓢箪（ひょうたん）が陽刻されている。屋根は、上方が起り下方が照るといふ、隅降棟（すみふりたね）が波形の曲線を描いた「照り起り」の形式をしている。軒下は水平で、軒上は中央部は水平であるが、軒端に向かって上部に反っている。軒幅は中央部が三センチ、軒端が六センチを測る。屋根全体の高さは二十四・五センチで、軒の長さは四十四センチを測る。屋根の上部には水平棟があり、長さ十九センチ、幅七センチを測る。室部の背面と向かって



向かって右面に刻まれた銘文（25%に縮小）

て右の側面に銘文が見られる。背面には「世話人／西網弥三左門／松尾仁左エ門」とあり、側面には「戊安^寅五／午正月」と刻まれている。世話人の文字以外はすべて縦書きである。幕末の安政五（一八五八）年に西網弥三左門と松尾仁左エ門の二人の世話人によって祠が建立されたことがわかる。すぐ横に深江大日靈女神社奉賛会によって立てられた説明板があり、山の神の祠は今も信仰の対象として大切に祀られている。

江戸時代には農民より五穀豊穡や雨乞いなど、信仰の対象とされてきた。また、六甲山が比較的すぐ近くにあり、燃料の薪を採取したり物資を運ぶ魚屋道が通じているなど人々の生活に直結しているため、今日でもこの山の神は祀られ続けているのであろう。深江には、山の神様が深江の人々に「ほしいものは何か」と問うと、村人は口を揃えて「山に入る権利」と答えた、という話が残っている。このことから街の背後にある六甲山は人々にとってかけがえのない



背面に刻まれた銘文（25%に縮小）

いものなので、その山に祀られている山の神は、大切に祀られてきた。今後も信仰の形は変わっていくかもしれないが、永く祀られ続けていくことであらう。なお、本文で掲載された写真と拓本の撮影と採拓は望月が行なったものである。最後になったが、志井保治氏には多大なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。



山の神の現状（左は石標）

史料に読む深江の歴史(八)

江戸前期の森稲荷神社と村

史料館副館長 大 国 正 美

このたび史料館で深江や青木村など本庄九か村の氏神である森稲荷神社に関する近世近代文書を収蔵することができた。森稲荷神社は、古く霊亀元年(七一五)にご神体が深江の浜に流れ着いたとされ、草創の伝承はさまざまな書に記載されている。しかし江戸時代には神階正一位が授与され、神主も従五位下、石見守・河内守・筑後守などに叙任したが、江戸時代の様子となると、『本山村誌』が多少紹介しているのは、ほとんど触れたものがない。今回新たに分かった事実も多く、新出史料を中心に、江戸時代の森稲荷神社と氏子の村々の様子を概観してみよう。

古代・中世の森稲荷神社の様子は全く不明だが、享保十九年(一七三四)の「撰津志」や寛政八年(一七九六)の「撰津名所図会」によると、社頭に天正九年(一五八一)鑄造の刻印のある金鼓があると記載している。金鼓とは、陣太鼓と陣鉦、雅楽の楽器の鉦、仏具の一種の三つの意味があり、実物が伝来していないのでどれだったのかははっきりしないが、氏子の本庄九か村が協力して鑄造したと考えられ、中世末期の本庄の結合力を示すだろう。また『本山村誌』によれば、元和元年(一六一五)拝殿が造営されたという。近世の初頭に一定の社殿整備が行われたようである。

その後の展開は定かではないが、『本山村誌』に紹介されている元禄五年(一六九二)の「寺社改帳」には、天照大神など五柱を一

つの社殿に祀っており、規模は表二間、奥行一間。梁二間半・桁行六間半で瓦葺きの拝殿もあった。

今回見つかった史料のうち最も古いものは宝永元年(一七〇四)八月の普請に関する史料で、その後の境内整備を物語る史料である。全部で三点で、いずれも差出人は本庄九か村(深江・東青木・田辺・北畑・小路・中野・森・三条・津知)の庄屋・年寄で、宛名は郡代・代官。願書によると「稲荷明神馬場之内長さ十四間のうち、少々坂にて雨ごとに掘れ、数度破損」という状況で「切り石にて砂留仕りたく」、また「馬場之内巷間余の小川御座候、先年は石橋二面御座候処、十五年以前午ノ年(元禄三年)洪水ニ而流れ申し候ニ付、其以後土橋ニ致し置き候へ共、雨ごとニ破損仕申すニ付、此のたび石橋ニ」したいとある。すなわち馬場先に切石で砂留を行い、洪水で石橋が流れ土橋でしのいできたが、再び石橋を設置したいというのである。そして三通目の願書では、「買い調べ申し候儀も難儀」で三条村山の石を利用したいという。村々の説明によると「社」再建之節も下し置かれ候間、此のたびも右の山にて下し置かれ候様」と前例をあげている。

これらの史料から、これより前に稲荷神社が再建され、三条村山から採石されていること、元禄三年(一六九〇)に石橋を流すほどの大規模な洪水があったことも分かる。稲荷社の再建がいつのことか、現時点では明らかではないが、前例としてあげたということは、さほど遠い時期ではなからう。

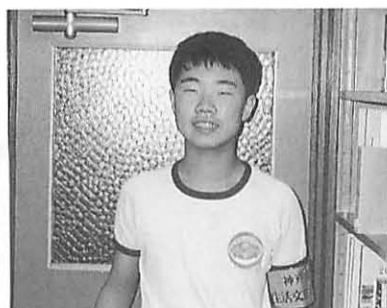
元禄時代といえは、大河ドラマ「元禄繚乱」でおなじみの高度経済成長の時代である。それまでの社殿そのものの造営に続いて、馬場の土橋や砂留など、境内全域にまで整備の範囲を広げたわけで、高度経済成長の恩恵が、村々にさらに行き渡り、富の蓄積も進んで来たことの反映だろう。

トライやる・ウィークと史料館

— 本庄中学校の生徒を受け入れて —

史料館研究員 道谷 卓

昨年（平成十年）から、兵庫県内の中学校で、二年生を対象に様々な職種で実際の仕事を体験することから社会のことを学ぼうという「トライやるウィーク」が実施されている。今年度（平成十一年）は、史料館の運営母体である深江財産区が、本庄中学校の生徒二名を受け入れることになり、「トライやるウィーク」期間五日間のうち、一日だけであるが、当史料館でもこの二人の生徒に「一日史料館員」になってもらい、史料館の活動を体験してもらうことになった。「一日館員」になってもらったのは、本庄中学校二年生の永本祐樹君と鳥巢愛さんで、社会科の歴史の授業が好きな二人である。



永元祐樹君



鳥巢 愛さん

史料館が二人を受け入れたのは、平成十一年六月八日（火）で、本来は休館日であるが、当日、団体見学の予約があったことと受入側の指導担当となる私の都合が良かったことからこの日の受け入れとなった次第である。

それでは、当日のスケジュールと二人の一日館員の活動を紹介しよう。二人は九時に史料館に来館、まず、お互いの自己紹介をしながら、私の方から史料館の概要と本日の予定を説明した上で、館の通常業務や来館者対応などの簡単な研修を行った。この日は十時から神戸市シルバークレッジ歴史探訪クラブの団体見学が入っていたため、団体見学の際の注意点なども説明、その後、実際に開館業務を手伝ってもらうことにした。展示室や展示ケースの電灯のスイッチを入れ、その際、展示物に異常がないかどうかのチェックをしてももらった。二人はこの時はじめて実物の資料を間近にしたということで、大いなる興味を示していた。十時になると前述の団体が来館、このとき、二人にはパンフレット・資料類の配布を行ってもらい、見学者の対応などを手伝ってもらった。見学者もシルバークレッジという高齢者の方々なので、二人の一日館員は、孫のような存在だということから、二人の奮闘ぶりに暖かいエールを送って下さっていた。

そして、午後からは展示資料の収納作業、展示室・収蔵庫の点検作業を手伝ってもらうことにした。その日、ちょうど「季節の展示コーナー」の五月人形を撤収・収納す



団体見学の説明の時

ることになっていたので、二人に、実際その作業を行ってもらった。二人とも博物館の資料を直に手で触れるということは初めてと言うことで、最初は何かおそろおそろぎこちない手つきで、資料を扱っていた。そして、私が「そんなに緊張しなくてもいいよ、普段通りにすればいいよ」と言ってあげるのだが、やはり、二人は、資料を壊しては大変という気持ちで先に立つのか、何か腫れ物にでも触れるような感じで、資料を扱っていた。しかし、しばらくすると、緊張感も収まってきたのか、二人から私に話しかけてくる余裕が出てきて、最後は先ほどの緊張感あふれる様子とは打って変わって、和やかな雰囲気の中で収納作業を終えるに至った。

次に、二階の民具展示室のガラスケースの清掃作業を手伝ってもらうことにした。ガラスを磨くという作業は、学校の窓ガラス拭きでも慣れているようで、結構スムーズに進んだ。でも、ガラスケースの鍵をはずし、ケースを開けて内側からガラスを拭く段になると、資料に腕や体が触れて壊れないだろうかと心配そうに拭いていたのが印象的である。

さて、この時、せっかく展示ケースを開けたのだから、何でも触りたい資料があれば、遠慮なく触ってみるようにと言ってみた。すると、永本君は古銭に興味があるから、それを実際に触ってみたいと言いい、鳥巣さんは、昔のままごと道具に興味を示し、それを手にとってみたいと言った。たまたま、これら二つの資料は、展示ケースの中でも無造作に置かれていたものなので、私も置き方を考えた方



展示作業をする2人

がいろいろと思っていたところで、それならばということ、二人に、それらの資料を自分なりに考えて展示してみなさいという、二人は試行錯誤しながら展示作業を行った。永本君は古銭を時代順にきちんとしかも見栄えよく展示してくれ、鳥巣さんは自分がこのままごと道具で遊ぶときにはどうするかということを考えながら、美しくそして道具の種類ごとに正確に並べ替えてくれた。この時、二人が展示の並べ替えをしてくれたところは、その後、今もそのまま展示している。



ままごと道具を並べかえる



古銭を並べかえる

これで、二人の一日館員の業務は終了ということになったわけだが、二人とも、生の歴史資料に直接触られたということが、とても良い体験になったと言ってくれた。

わずか一日だけの史料館の館員としての体験ではあったが、二人が、今後、より歴史が好きになることを願ってやまない。そして、こうした史料館でのトライやるウィークの経験者から、次世代の史料館のスタッフが育ってくればという期待もこめて、来年度もこのような機会があれば、史料館としても積極的に協力していきたいと思う次第である。

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

平成十年七月以降

△平成十年▽

- 7月26日 短歌の会（見学者 二十九名）
- 10月31日 本山南小学校 三年生（見学者 七十一名）
- 11月5日 東灘区市政アドバイザー（見学者 二十一名）

△平成十一年▽

- 1月20日 こうべ小学校 三年生（見学者 八十三名）
- 1月28日 福池小学校 三年生（見学者 七十三名）
- 本庄小学校 三年生（見学者 一二二名）
- 1月29日 六甲アイランド小学校 三年生（見学者 一〇一名）
- 1月30日 灘小学校 三年生（見学者 三十六名）
- ひまわり学童保育（見学者 十二名）
- 2月2日 本山第三小学校 三年生（見学者 八十八名）
- 2月5日 御影北小学校 三年生（見学者 一二七名）
- 東灘小学校 三年生（見学者 九十九名）
- 2月6日 六甲小学校 三年生（四十八名）
- 2月9日 本山第一小学校 三年生（見学者 一一三名）
- 2月12日 住吉小学校 三年生（見学者 一一六名）
- 2月19日 西灘小学校 三年生（見学者 四十九名）
- 3月6日 神戸市立盲学校 三年生（見学者 四名）
- 6月8日 神戸市シルバークレッジ（見学者 九名）
- トライやるウィーク・本庄中学校二年生二名を受入れ、一日館員になってもらう。
- 6月17日 東灘区役所新規採用職員研修（見学者 三十名）

- 6月27日 震災モニユメントウォーク（見学者 一〇〇名）
- 7月3日 甲子園大学人間文化学部（見学者 十一名）

編集後記

史料館のパンフレットを約十年ぶりに改訂しました。全面カラーで代表的な展示物の写真を掲載しています。来館の記念には是非お持ち帰り下さい。

それから、二階いろりのコーナーの展示方針を少し変えてみました。資料にはあえて解説用のキャプションをつけていません。どのようにして利用したのか考えてみて下さい。

さて、今号は、望月学芸員の深江山の神についての調査報告、大副館長の新着資料の紹介、そして、私のトライやるウィークの報告の三本を掲載しています。

（道谷 卓）



『生活文化史』 第26号 99・10・10

編集／道谷 卓
発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-17
☎ 078-453-4980 (FAX兼用)